



東日本大震災によせて私が思うこと

電機大の保倉明子先生から引き継ぎまして、執筆させていただきます千葉大学理学部の沼子です。このお話をいただきましたとき、ちょうど前任地の徳島大学総合科学部から西千葉の千葉大学へ移動が決まった直後ぐらいで、引越などが大変かもしれませんが、と保倉先生からそっとバトンを渡していただきました。当初は、なにか私の身の回りの趣味のようなことを書こうかと思っていたのですが、そこにこの大震災で、まったく状況が変わってしまいました。余震や原発の事故など、震災はまだ続いており現在進行形で深刻な状況（4月中）が続いているのですが、まず、被災された皆様のご無事と、一刻も早くこの状況が回復することをお祈りいたします。

実は、私が助手として徳島大学に赴任したときも、前年に阪神大震災が起こり、神戸を中心とする関西圏が復興の最中でした。1995年1月の阪神大震災のときには、私はまだ博士課程の学生で関東におり、ちょうど徹夜で書き物をしていたときに、つけっぱなしだったテレビから「関西で爆発事故が起こっています。」というニュースが流れてきたことを覚えています。そのときにはまだ暗い中で映像も炎が遠方で立ち上がる様子しか流れず、あの神戸の街の惨状が伝わり始めたのは、夜が明けてからでした。それから連日阪神大震災の報道が流れ、全国から支援物資やボランティアが神戸に集結して被災地の復興に尽力していた最中、3月にまた、今度は東京で地下鉄サリン事件が発生しました。震災地の支援はまだまだ必要な時期にもかかわらず、直接被害を受けた関東圏ではそれ以降ニュースの主役がこちらに切り替わり、阪神の被災地の扱いはどんどん小さくなってしまいました。やはり、距離のある関西で起こった災害と、自分にも降りかかっていたかもしれない距離で起こっていた災害では、とらえ方に温度差が生じるのは仕方ないことかもしれません。私自身も、それから1年後に徳島に赴任するまで、阪神大震災はもう過ぎ去った事件のように感じてしまっていました。淡路島を挟んで兵庫県に隣接する徳島には、ご家族が被災された方々もおられたり、また神戸ではそのときでもまだ建物の多くが損傷を受けた状態で残っていたりと、恥ずかしながら西に来て初めて、「ああ、西は本当に大変だったんだ」と、阪神大震災を実感いたしました。

それから15年、今度は東日本で震災が起こってしまいました。私は奇しくもその前の週に研究打ち合わせで仙台にお邪魔しており、仙台空港にもおりましたので、津波にのみれる仙台空港の画像は本当に生々しく感じました。また、今回はテレビだけでなく、インターネットという強力な情報源があるおかげで、遠く離れた徳島からも、東日本の被災の様子をリアルタイムに詳細に知ることができました。阪神大震災の時よりも、私個人の感覚で述べさせていただければ、人の移動や交流の利便性の向上や情報網の発達により、以前よりも距離感や物事のとらえ方の地域差・温度差がずいぶん小さくなったように思います。

続いて、原子力発電所の事故が起こってしまい、こちらはまだまだ予断を許さない深刻な状況にあります。原子力発電について、これまでは「電気は必要だから原子力を使うけれど、その安全は誰かが保障してくれているから大丈夫」のように他人事として原子力をとらえていた風潮が一転し、原子力発電の技術や体制、そして今回の事故に関する対策に関して、ほとんどの人が関心をもってしている状況へと大きく変わってきています。私は、これほど一般の人の中で、原子力発電のことや放射能の話が飛び交う日がくるとは夢にも思っていませんでした。それを受けて、原子力を専門にする人が一般の人々が持っている数々の疑問に対して、様々な手段で回答をするように組織だった働きかけをしたり、それぞれの立場で何が自分たちにできることだろうと考え、それを実践しようとしている人も出てきています。日本全体がこれほど一体となってことに臨んだことはこの近年ではじめてではないでしょうか。これを持続して、一日も早く復興できることを祈っています。また同時に、今回の災害で得られた様々な情報や技術が風化されず、将来また同じような災害が起こったときに、次の世代が有効に使うことのできる知識として残ってくれればと思っています。若い世代の理科離れが嘆かれている昨今の日本ですが、大きな脅威である自然と向き合いながら安泰な生活を送ることのできるよう、自然を知り自然を制御するために発展してきたのが科学技術であり、実学として自分の身を守るためには必要不可欠な知識だと意識すると、理科に対する感覚が大きく変わってくるのではないのでしょうか。インターネットや電子情報が強力なツールとなっている現代では、書物よりももっと楽に様々な災害や事件、またそれらに対する対処法などの情報を得ることができるようになっています。また、上述のように、地域間あるいは世代間による感覚の差は、小さくなってきています。今なら、専門だけでなくグローバルに様々な知識を身につけることができる教育を構築することができるかもしれません。これは、私が大学で試してみたいことの一つです。

このリレーエッセイも、世代や専門を超えた方にバトンタッチされてきて、とてもおもしろいシリーズになっていますね。私はこのあと、愛知工業大学の手嶋紀夫先生にバトンをお願いさせていただきました。手嶋先生は、私が筑波大生時代の河髙研同期で、当時から大変お世話になっていました。卒業後は徳島と愛知では距離が離れているので、お会いできるのは分析化学会の時くらいだったのですが、産総研の津越さんが主催されている鉄鋼関連のフォーラムでご一緒したり、お会いできなくても手嶋先生をご存じの方からお声をかけていただいています。ここでも地域や専門の違いによる温度差がだんだんなくなってきていることを感じています。というわけで、手嶋先生、どうぞよろしく御願いたします。

〔千葉大学大学院理学研究科 沼子千弥〕